

風が吹いたよ

シャーララ ラララ ラララララ
シャーララ ラララ ラララララ
休日の度の雨が 今日晴れたよ
シュールル ルルル ルルルルル
シュールル ルルル ルルルルル
寒い日の終わり告げる 風が吹いたよ

夕暮れも近い 午後の薄陽の中
車を停めて 丘の上の公園
たくさんの暗い雲 吹き飛ばすように
西からの涅槃吹き 上着の背にたまる

そびえたつ風車の 回る音も聞こえない
鳴り止まないのは風
手にしたモバイルに取り込んだ動画も
聞こえるのはただ風

シャーララ ラララ ラララララ
シャーララ ラララ ラララララ
休日の度の雨が 今日晴れたよ
シュールル ルルル ルルルルル
シュールル ルルル ルルルルル
寒い日の終わり告げる 風が吹いたよ

君は回る風車の影を縄跳びにして
10回飛んでは疲れて座り込む
フードを被った幼い子供たち
真似をしては嬉しそうに笑う

見下ろす海岸に繋がれたボートを
左右に揺らすのは風
手にしたモバイルに取り込んだ動画も
揺らしてるのはただ風

シャーララ ラララ ラララララ
シャーララ ラララ ラララララ
休日の度の雨が 今日晴れたよ
シュールル ルルル ルルルルル
シュールル ルルル ルルルルル
寒い日の終わり告げる 風が吹いたよ

こんなことでいいのかな

仕事帰りの手袋と
マフラーが暑くなって
押し込んだカバンが
妙に膨らんできて
電車帰りで脱いだコートも
網棚に忘れてしまい
頭を抱えるところで
季節の変わりを知る

桜が咲く前にひと足だけ先に
感じる春の訪れ
こんなことでいいのかな

モノトーンの枝には
少しずつ色がつく
まだ少し寒くても
そこに春が来てるんだ

花粉症で目が痒くて
鼻もムズムズしてきて
分厚いマスクの上に
ゴーグルまでして
洗濯物も外に干せずに
暖かい日差しあっても
部屋干しになる辛さに
季節の変わりを知る

桜が咲く前にひと足だけ先に
感じる春の訪れ
こんなことでいいのかな

モノトーンの風景に
少しずつ色がつく
まだ少し寒くても
そこに春が来てるんだ

いつかまた出逢えたら

いつかまた出逢えたらいいね
その時はお互いに
変わっているだろうか
今日の日が来ることは前から
わかっていたはずなのに
やっぱり寂しい

別れの3月
少し離れるだけで
しばらく会えないと
思うのは何故だろう

これまで一緒にいた時間が
全て思い出になるなんて
別れの言葉は言いたくはない
感謝の言葉も照れくさいけど

いつかまたきつと話し合える
その時はお互いに
通じ合えるだろうか
これまでずっと過ごした時が
楽しかっただけに
やっぱり寂しい

別れの3月
とても辛いのに
綺麗に別れたいと
思うのは何故だろう

これまで一緒にいた時間が
全て思い出になるなんて
別れの言葉は言いたくはない
感謝の言葉も照れくさいけど

春時雨

さっきまで晴れていたのに
手にした傘 広げたときは
アスファルト 濡らすだけでなく
流れる雨に変わっていた

もしかしたら自分が
気づかないでいるだけで
もうすでに
嫌われているのかもしれない

人の心を見ようと
色々気にしすぎていると
見えないものが見えてきてしまう
それは良くないこと

春時雨 打たれるしかない
じっと我慢するしかない
そのうち降りやみ
また晴れてくる時
ひたすら待ってるしかない

昨日のことは忘れてしまおう
よくある ことだきつと
何故あの時 あんなふうに
言われ たんだろうなどと

もしかしたら自分が
わかっていないだけで
もうすでに
周りの人は
知っているのかもしれない

下手に繕うとしても
わざとらしいだけで
知られたくないこと知られるだけで
それも良くないこと

春時雨 打たれるしかない
じっと我慢するしかない
そのうち降りやみ
また晴れてくる時
ひたすら待ってるしかない

春彼岸の旅

寒さが緩んで 過ごしやすくなる
嵩張る外套 着ていくこともなく
雪のないところへ 出掛けてみよう
準備もそこそこ 気軽な旅だ

昼と夜の長さ 同じになり
明るくなった夕方散策できる

つくしが顔出す土の道を
厚底の靴で踏み締める
冬の間鈍った五感が
よみがえる嬉しさ 感じる

桜の開花が 聞こえ始めてくる
そういえばあの頃 別れる人たちと
ブルーシートに 紙皿並べて
冷たいお酒 交わしたのを思い出す

暖かい陽射し時々陰るたび
砂混じりの風首すくめ
目をつぶらせる

木蓮の花咲く古びた茶屋に
駆け込むように逃げ込む
ぼたもちこし餡 目の前の皿で
和菓子ナイフつつく ひととき

らいはい

声のない語らいは
静かに時を刻む
これまでじっくりあなたの身になって
考えたことは一度もなかった

自分のためではなく
未熟な私 慮ってくれた

あの時それ以上言わなかったのは
考えることを教えてくれたから
自分で考える力をつけると
何も言わないで背中で伝えた

川に漂う小船に乗って
旅立つ姿が目映る
簡素ないつもの言葉だけで
ちょっとそこまで行くような口ぶりで

あふれる思いが
とめどなく流れてくる

あの時それ以上言わなかったのは
傷つくことを防いでくれたから
自分で立て直す力をつけると
何も言わないで背中で伝えた

西へ

西へ向かい 早春の東海道
車窓からふと見たら 関ヶ原雪景色

ふるさとゆくのぞみ号
降りる頃はすっかり晴れていたよ
懐かしい在来線に
スーツケースと共に急ぎ乗り込む

いつからきてなかったろう
長居するところもなくなり

ヒュールル ルルン ルルルルル
晴れた空 流れる雲
ヒュールル ルルン ルルルルル
瀬戸内の風 浴びて
ヒュールル ルルン ルルルルル
里山に ぶつかる雲
ヒュールル ルルン ルルルルル
彼岸西風 浴びながら

少ない車両に 気後れして座れず
ドアの そばに立って 車内を見下ろす

向かい合わせのボックス 席
様々な人 乗り あわせているよ
どこか平和な風景
心落ち着いて緊張解ける

いつからきてなかったろう
方言が新鮮に聞こえる

ヒュールル ルルン ルルルルル
晴れた空 流れる雲
ヒュールル ルルン ルルルルル
瀬戸内の風 浴びて
ヒュールル ルルン ルルルルル
里山に ぶつかる雲
ヒュールル ルルン ルルルルル
彼岸西風 浴びながら